

第二部

国道6号線

昨日の余韻を心に、巡礼二日目です。原ノ町駅前を出発して6号線を南下。帰還困難区域を通過する巡礼です。バリケードのある6号線を通るのがはじめての人が多く、車中の空気は緊張していました。シ〜ンと静まりかえる車中。旅人の心は様々な祈りが捧げられているようでした。8年前から手が付けられていない、人の住んでいる痕跡のない家々、人の息づかいを受けていない環境は、ぼっかりと穴があいたようでした。それでも、植物はそれぞれの営みを続けているのがいじらしく感じられました。



私有地に入らないようにバリケードが張られています。

そんな道路脇では、労働者が・・・その姿を見た私の目は点になりました。車の窓を開けてはいけない。二輪車も、歩行も通行を禁止されている。車の停車も許されない。信号機は黄色が点滅している6号線で写真のような作業員???



廃炉資料館

昨年オープンした、廃炉資料館をたずねました。映像をみながら、廃炉がどのように行なわれていくのか分かりました。日頃の疑問を、説明してくれた女性にぶつけ、別の男性が細かな説明で補助をしてくれる場面が何度かありました。資料館の説明の職員に問うても仕方のないこと

でも、悶々としている疑問はやはり口をついて出てくるのでした。「こういうコメントがあったということ、上の人に伝えてくれればいいのですよ」と女性職員をフォロー。飯舘村で線量計が二つある理由などの説明を聞いているので、素直に「あ、そうですか」と受け容れがたい状況を事故後の対応が作り上げてしまっています。素人が自分で学び、判断し、行動することの難しさを今回も感じました。「核」そのものは、自然界に存在するもので悪ではないのでしょう。しかし、人間によって間違った使い方をされてしまった「核」、分裂と不信を生じさせた「核」は、「悪」ではないでしょうか。

今回資料館で新しい体験をさせてもらえました。全面マスクでの原発労働者の話しをよく耳にしていました。あの異様な姿のマスクを何度もテレビで見ました。現物を目にしたのは初めてでしたが、それをかぶってみたのは、勿論はじめてでした。ぴちっと密閉してマスクをかぶったわけではないのですが、呼吸は以外と楽でした。旧式のものとは新式のもの展示されていました。改良されて新しいものは軽くなっていました。



私がつけているのは新式のマスク。手には持っているのは旧式のものです。

第一原発の敷地の模型が作られていて、その前で説明を受けました。



あらためて、どうするんだらう？と。もうここに汚染水を貯蔵するの限界

ボルト式の貯水タンクを溶接型のタンクに。中の汚染水を移し替えているのですが、最後は作業員の手作業。線量は作業をしても問題ないほどにアルプスで核物質を除去してからの水とい

われても、う〜ん??という感じでした。
 とにかく、全てが未知の世界で、今後どのような健康障害が出て来るかも分らないわけです。私が気になっているのは、3月12日からのあのとき何も知らされないまま、日常生活を送っていた人たちのことです。あの時に、放射能が流れ、雨や雪で地に落ちた地域も含めて、半径ではなく、そこがどこかはスピーディのデータを見れば分る筈です。放射能の影響を受けた地域にいた全ての人に、そして原発労働者、除染労働者に「被曝者手帳」のようなものが発行されるべきではないかと思っています。データはあるのですから、誠意を尽くしていのちを守っていくのが尊厳ある人の在り方ではと。「直ちに健康に影響はない」とすまされていること自体に不信を募らせるのです。あの時の被曝がどうだったか。子供たちの甲状腺癌が増加しているというのは、あの時の被曝の影響ではと思うのは常識的な思考経路から導きだされるものではないでしょうか。原因結果が分らないということも、謙遜に受け止めて、明確な原因説明ができないから、なかったことにするのは、大きな？です。今こそ、人は自然と神の前に謙虚になるチャンスを与えられているのだと思いました。

Jビレッジ

事故収束作業の前線基地であった時から、何度も訪れていたJビレッジです。すっかり、サッカーのピッチに変身しているかつての前線基地は、あの時のことを知らなければ、ここがどんなに緊張した場所であったかということを想像することができないと思われました。大学生がピッチで大会をしていました。Jビレッジの中も、ピッチも放射線量は管理されていました。が・・・



え 煙 広
 ます 突 野
 す ぐ 火
 傍 力
 に 電
 み 所
 の

福島第一原発までは20キロ。第二原発までは10キロしかないので。今後事故が起こらな

いとも限らないのですが・・・日本中、海岸線のいたるところに原発はあるのです。その意味では、どこに住んでいても安全の保証はないのですけれど。

Jビレッジで昼食。

広野町振興公社「バナナ農園」

広野町も核（原発）事故後全住民が避難を余儀なくされました。が、他の地域と比べて線量は低かったこともあり、いち早く帰還を決断し、お米の栽培も早くから取り組まれました。双葉地域の新たな特産品としてバナナ栽培が町100%出資で始められました。原発の影響で使われていなかった800平方メートルの園芸用ハウスを利用しての栽培です。社長は町役場に勤務していた人で、事故後の住民の苦悩、悲しみに丁寧に関わって来られた人です。「地獄をみました」との言葉は、とても重く、今も私のこころの底に沈んでいます。「人は追いつめられると、狂気になれるのだ」という言葉とともに。それほどの苦悩をともにされたことから、住民が生きていくことのできる術をなんとか作り上げようと努力されていることが伝わってきました。

住民の夢、希望、前を向いて挑戦して生きる生き甲斐づくりを目指されていました。



バナナの蜜は・・・舐めたことありますか？
 はじめてなめさせてもらったバナナの蜜はとても甘かったです。

あと1ヶ月遅く訪ねていれば、バナナの収穫。国産バナナを購入できたのに。残念でした。今のところ1本650円の超高級品です。



(続く)